「元初まりの話」に登場する動物たち（21）

「引き出し」としての「くろぐつな」③

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

豊作祈願の「野神（農神）まつり」

奈良県内のあちこちには、無形民俗文化財の「大和の野神行事」が残されている。これは、稲作の守護神である「野神（農神）」を祀る行事の一つで、端午の節句のころに行われることが多い。行事の主体はほとんどが子どもたちで、藁でつくった「ジャ（蛇）」と称するものを持ち運んだり担いだりして村々を回り、最後には小祠や大木にやってきて「ジャ」を「野神」に奉納して終了する。一連の所作が終わると、子どもたちは供えられていた団子やお菓子を分け合い、食べてすべての行事は完了する。

豊作祈願を目的としたこの行事は、稲作が主体の大和盆地では昔からおこなわれてきた。たとえば、天理市内では「野神さん」として親しまれている。

毎年５月５日（端午の節句）、天理市平等坊町でおこなわれるこの行事は「野神さん」と総称されているが、藁で作られた「ジャ」を納める場所、という意味で使われることもある。この行事に参加するのは子どもたちだけである。小・中学生の男子が地域内から集めた藁で「ジャ」を編み、それをみんなで担いで村はずれの「野神さん」の塚へおさめに行くというイベントである。行事の最後は、エノキ（榎、別称ヨノミの木）に「ジャ」を巻き付けて終わる。しかし、近年は少子化によってこの役割を担う子どもたちは減っているという。

同じような「野神まつり」は、同市内新泉町のスサノヲ神社前でも毎年５月３日におこなわれる。子どもたちがジャを持って歩く行事で、平成 13 年３月、天理市無形民俗文化財に指定されている。五穀豊穣と子どもの成長を祈願する行事である。同市内岩室町では、集落南西の字ノガミにある小さな林の中に「野神さん」をまつる小祠がある。その前に畳半分ほど広さの空間があり、その小さな空間で６月４日には田植えの所作がおこなわれる。雨ごい神事もここでおこなわれる。また同市内南六条町では、集落から少し離れた道路脇にムクノキの大木がある。この木にはしめ縄が巻かれ、ここで毎年６月５日に「野神まつり」がおこなわれる。行事に参加するのは 17 歳の男子である。

このように、「野神まつり」は稲作と深い関わりがあり、豊作を祈願する重要な行事である。その行事を毎年担うのは子どもたちであり、子どもたちこそ子孫繁栄の象徴といえる。

写真１．10 個の卵を産んだ黒化型シマヘビ（クログツナ）の雌。
10 個の卵から、黒化型と通常型の幼蛇が半分ずつ誕生した。

「野神さん」と「ジャ（蛇）」の関係

ヘビが交尾をする姿は、まるでしめ縄の形状のように、雌雄が螺旋状に絡み合った姿に似ている。それは DNA の螺旋構造のようでもある。この絡み合った状況の中で、雄は総排出口からペニスを出して雌の総排出口に挿入して受精させる。その後、雌は 10 個前後の卵を産む（写真１）。このようにして、ヘビは長い年月の間、種や個体群を維持させてきた。

「野神さん」である「ジャ」の姿は、明らかにヘビの姿を模したものである。子孫繁栄と五穀豊穣を願いながら、ヘビと稲作農業との関係を深めてきたのではないだろうか。

水田域を中心に活動するヘビには、シマヘビ、ヤマカガシ、ニホンマムシ、ヒバカリの４種がいる。「野神まつり」がおこなわれる水田域でよく目にするのが、前者のシマヘビとヤマカガシである。特にシマヘビは、日中でも活発に活動し、稲が実を付けるころにやってくるスズメなどを好んで捕食する。豊作を願う農家にしてみれば、豊作を邪魔する小鳥たちは“害鳥”であり、いなくなってほしいと思うのは当然である。その思いと、シマヘビ・ヤマカガシの狙いが一致すれば、農家にとってこれらのヘビは、神様からの使い、あるいは神様そのものと考えるのも不思議ではない。

写真２．収穫前の田んぼに設置された「模擬ヘビ」。

前号、前々号で紹介したように、ニホンマムシが「夜刀神」になったように、シマヘビとヤマカガシが「野神さん」になっても決して不思議ではない。むしろ、昔であればそれが自然だったかもしれない。たとえば、天理大学に隣接する収穫前の田んぼに、先端部分を赤く塗った「模擬ヘビ」が設置されたことがある（写真２）。これは案山子の一つで、小鳥たちに稲穂を食されたくないと考えた農家の知恵であろう。鳥は一般に赤色を見分けられることから、効果はあるのではないかと考える。

「引き出し」とヘビの関係

『天理教教典』「第三章」には、月日親神がクログツナを食べてその心味わいを試され、「引き出し」の理に「をふとのべのみこと」の神名を授けられた、とある。そして「第四章」では、「をふとのべのみこと」は「出産の時、親の胎内から子を引き出す世話、世界では引き出し一切の守護の理」と教示されている。これは、母親の胎内から赤子が生まれて成長するように、人間社会では子孫が繁栄し、農耕では確かな立毛（農作物）が約束されることを意味する。

雌雄が和合する「ジャ」のように、子孫繁栄や五穀豊穣を祈願する「野神まつり」は、「引き出し一切の守護の理」と関係があるのかもしれない。

いずれにおいても、この大和盆地やその周辺域には、「ジャ」や「野神さん」に関する行事・祭事は多く、その化身であるヘビはそれだけ畏敬の対象だったのではないか。なかでも、黒化型ヘビは、その象徴的存在だったのではないだろうか。